

宮里定三さんのインタビュー

日時:1997年11月23日 場所:那覇市沖縄ホテル

私は昭和6年頃からずっと戦争になるまで移民と関係していましたよ。神戸で。昔は横浜も神戸もそうですが、旅館があつてね、特殊な、移民だけを扱う旅館ですよ。移民旅館。移民宿ね。これは横浜と神戸にしかないんですよ。

横浜も神戸もそうですが、沖縄移民が特に集まっていた旅館がありました。横浜には「横浜ホテル」もあるし、「鳴門旅館」もあるし、それから「宮崎旅館」もあるし、3つありましたよ。「鳴門旅館」というのは本町小学校の隣だったな。あの紅葉坂というのがあるでしょ。あの坂の上に料理屋があつて、(この間) 降りていったけど無かったな。「宮崎旅館」というのもあったですよ。3つとも沖縄の人が経営しておったよ。

戦前の移民を扱ったのは私しか残っとらんね、もう生きている人はね、私はね、船は毎日あるわけではないから、ハワイやアメリカから浅間丸とか竜田丸が入ってくると向かいに行きよったですよ、横浜まで。だから私は毎月2回横浜に行っていましたよ。特急乗ってね。

横浜の「鳴門旅館」は120~130人だろうな。「横浜ホテル」と同じようなもんだから、そんなもん違うか。「宮崎屋」もだいたい似てる。「大勢屋」は大きかったな。あれは、150~160人は入れたんじゃないかな。やっぱりそれは山口からの移民が多いからのような気がした。

当時ね、横浜~ホノルルは65ドルですよ。これは外国船に乗っても、日本船に乗っても料金は同じ。180円かな。3等でね。2等は倍以上だからね。1等というのは部屋が2つくらいしかないですよ。3等が一番下で広間だからね。ホノルルまで丸1週間。横浜から神戸が今日出れば一晩だからね。神戸からだと8日間かかるわけだ。陸路で行きたければ、船会社から切符出しようたですよ。汽車の切符。荷物だけ積んでね。見物しながら陸路で行きたい人は横浜から乗っていいわけだ。横浜から乗ると5円差があったから、それを船会社が出したんですよ。

移民というのはどっちかというとな農村の次男・三男で、あまり家庭もよくない所から行くんですよ。金持ちが行くのではないんですよ。だから金を余計に使ったりすることはない。これは旅費も借金して行くわけだからね。無駄な金を一銭も使わないというのが移民ですよ。物を買ったり、飲みに行ったりしないですよ。なるべくセーブして、で我々もそう見ていたですよ。農村の真面目な人だから、稼ぎに行く人だから心構えが違うわけですよ。帰りには、もう相当余裕のある人が帰って来るから、飲みに行ったり、遊びに行ったりしたよつたけどね。もう向こうで儲けて、錦を飾って、帰る時には必ず蓄音機を買った。お土産に。行きの場合は渡航中に何を食べるとか、かつお節をもつとか、黒糖をもつとかその準備ですよ。それから胡麻をお菓子みたいに作ってね。そういった船中で食べるものもあつて、一般のものは買わないですよ。また買う余裕がないですよ。

いやいや、横浜は懐かしいねえ、こっちは。横浜もずいぶん通って、ついこの間も3年前に行つたけど。車に乗ってね、野毛山からずっと見たけど、全然、この思い出が湧いてこないんだよな。桜木町見ても分からんしね。まるきり変わってさ、大きくなりすぎて。神戸行っても、横浜行っても、誰かれ捕まえて話しようと思つても全然手掛かりがないんですよ。

【引用文献】

芹澤健介(1997)『戦前の横浜における移民宿の実態－沖縄移民との関係を中心に－』横浜国立大学経済学部国際経済学科卒業論文(未公開)24-29頁